

要約

多言語社会ブータン王国における言語生活研究 複言語話者の言語社会化と言語認識

京都大学 佐藤美奈子

1. 概要

本研究は、「言語社会化論」(Ochs & Schieffelin 2012)を理論的枠組みとし、時代の転換期にある多言語社会ブータンにおける複言語話者の言語意識と言語社会化の諸相を解明することを目的とする。ブータンにおいて1960年代初頭に本格的に導入された学校教育は、現在までの60年間の歳月にわたり、複数の言語が複層的に共存する伝統的な多言語社会と、複数の言語を日常的に使い分ける複言語話者であるブータンの人びとの言語認識と言語生活をどのように変えたのか、マクロなレベルにおける教育政策と社会構造の変化と、ミクロなレベルにおける個々人の言語行動と言語意識、そして両者を結ぶメゾ構造としての家庭生活と地域経済生活を位置づけ、3つのレベルにわたる調査と考察から明らかにする。

2. 問題意識

ヨーロッパを土壌として生まれた「多言語主義 (multilingualism)」がア priori な肯定的価値を付され、アジア、アフリカ等、非ヨーロッパ諸国にも広まっていくなか、19もの言語を擁する多言語社会ブータンでは、世界的潮流に逆行するかのように、国語「ゾンカ語」第一主義的国家開発と、国語と英語二言語による学校教育の拡充が精力的に推進されてきた。

ブータンでは、これまで外国人研究者と政府関係者らによる国家開発政策や学校教育の制度的側面、および高等教育機関に在籍する限られた社会層を対象とした研究が中心であった。学校教育制度の内側にいる人たち—現場の教師や学生、保護者—、さらに制度の外に置かれ、教育を受ける機会を得なかった国民の半数近くを占める人たちの言語生活や言語意識は、管見する限り、研究の対象にされてこなかった。しかしながら、マクロな社会の変化は、これら「普通の」の人びとをも巻き込み、その言語生活と言語意識を大きく変えつつある。

初等教育の就学率が92%を超え(PPDMoE2018)、学校教育は、もはやエリート官僚の養成を目的としたものでなくなっている。「普通」の人びとの視点からみた学校教育、およびそれが変えていく社会に対する認識の解明は、これまでのブータン研究における空白であり、早急に焦点化していくべきに領域であると考えられる。

3. 本研究の目的と研究課題

本研究の目的は、以下の2点である。第1の目的は、学校教育の現場で、家庭で、そして地域生活において複数の言語選択肢をもつブータンの人びとが、個々の場でどの言語を選択し、どのように用いているか、またその言語はどのような基準から選択されたものであるのかを現地調査に基づき詳細に叙述することである。それにより、時代の転換期にあるブータンの人びとが、自身が生きる社会の文化的文脈や個々の会話における文脈をどのように認識しているか、そしてそこにおける複数の言語それぞれの位置付けやその社会的機能をどのように理解して使用しているかを明らかにし、現在のブータンにおける人びとの言語認識と言語実践としてボトムアップに示す。

第2の目的は、時代の転換期にある社会に人びとがどのように対応し、その社会の一員となっていくか、そこにおいて社会の、そして個人の複数の言語がどのように関与するのかを明らかにすることである。時代の

転換期にある複言語話者独自の言語社会化の諸相を明らかにすることにより、それを新しい言語社会化モデルとして示す。

具体的な研究課題として、本研究が対象とする4つの領域—学校教育、家庭言語、市場および地域言語、個人の言語認識と言語実践—それぞれにおいて、以下の課題を挙げる。

第Ⅱ部「学校教育と言語」では、第1に学校教育の「内側」にいる人びと—現場の教師、学生、保護者—が、現行の学校教育制度と、それによる影響をどのように捉えているのかを明らかにする。第2に学校教育導入から現在に至るこの教育拡充の60年間で、その「外側」で生きてきた大多数のブータンの人びとは、学校教育の普及によって大きく変化したこの歳月をどのように生き、捉えているかを明らかにする。そして成人となった今、これらの人びとが教育を受けることは、彼ら個人としてのみならず、彼らの家族や地域社会にとってどのような意義をもつものとなり得るのかを明らかにする。

第Ⅲ部「家庭と言語」では、第1に「英語もゾンカ語もできる親」として、ブータンにて初めて家庭言語の選択肢をもつことになった親が自身の家庭言語をどのように意識し、日々の家庭言語生活を実践しているかを明らかにする。また、もし仮に意識と実践に相違がある場合、それはどのような理由によるものであり、それについて親自身はどのように認識しているかに着目する。第2に現在ブータンの家庭では世代による教育経験の相違に伴い、民族語モノリンガルである祖父母と英語とゾンカ語が生活の中心となる子どもたちとの間で言語認識と言語生活の相違が顕著となりつつある。三世同居を基本とするブータンの家庭生活において親は、中継世代として自身をどのように位置づけ、その役割を認識しているのか、三世家族における親の自己認識と役割認識を明らかにする。

第Ⅳ部「市場と言語」では、第1にマクロな社会における言語の社会的な位置付けや機能の変化が市場における商人や客の言語認識や言語実践にどのように反映されるか、あるいは市場には市場独自の「市場」の論理があり、それに基づいた言語選択がおこなわれるのかを明らかにする。現在ブータンでは、初等教育の就学率が92%を超える（PPDMoE 2018）までに学校教育が普及した。その一方で、地域の市場で中心的役割を担う30代後半から50代の半数以上が教育経験をもたない。とりわけ、全国の貧しい地方農村地区からこれらの教育経験のない国内移住者が大量に流入し、その割合が住民の85%に達しようとしている首都ティンブーの背景を考慮した場合、ティンブー市場において、はたして「全国的な共通語」として位置づけられる（Wangdi 2015）ゾンカ語と英語はどれほど機能し得るのか、それとも現在の市場独自の「共通語」が存在するのかに着目する。第2にティンブー市内のそれぞれ異なる地区に位置する市場では、市場ごとに特徴的な言語使用が観察される。これらの相違は、ティンブーに流入した国内移住者の社会化過程の進展と、それに伴う都市内移動と集住、およびその結果生じた住民の住み分けとどのように関連し、それを反映するのかを明らかにする。

以上、第Ⅱ部から第Ⅳ部で取り上げる3つの領域は、現在の多言語社会とそこに生きる複言語話者であるブータンの人びとを領域ごとに切り取り、その領域を象徴する属性—学校教師と学生、親と子、商人と客—の言語認識と言語実践を共時的観点から解明するものである。では、通時的観点からはどうであろうか。第Ⅴ部「ある移住者一家の語り」では、2つの時間軸からブータンの多言語状況と複言語話者の言語社会化過程を考察する。ひとつは、複言語話者個人の「生涯」という時間軸である。一個人の生涯にわたり、その個人の、自身をもつ複数の言語に対する認識と使用、それらの言語を用いる自己に対する認識は、どのように変化するのか。ひとりの複言語話者の人生の過程を言語を視点に考察する。もうひとつは、教育が導入された60年間を中心とする社会の「時代」という時間軸である。現在は、教育第1世代と第2世代、さらに教育を受ける機会がなかった教育ゼロ世代が共存する、ブータンの歴史史上最後の時代である。各世代は、この教育拡充の歳月と、それによって生じた社会的、言語的变化をどのように捉えているのか、さらに世代によって時代認識はどのように異なり、その相違は何を意味するのか、ブータンの一般の人びとの視点からみた、この60

年間という時代の認識を明らかにする。

4. 本研究の意義

本研究の意義は、その対象、方法、時期の3点における独自性に集約される。第1の対象について、本研究は、先行研究において対象とされてこなかった、また自ら声を挙げることもなかった、「普通」の人びとの言語生活と言語認識をつぶさに拾い上げ、記述したものである。それは、ブータン政府が示す一元的なブータン像とは必ずしも一致しないものであるが、本研究では、対象とした領域—学校教育、家庭言語生活、市場・地域言語領域—における各々の属性—教師・学生・保護者、親・子、商人・客／ホストコミュニティ・移住者—や世代—教育第一世代と第二世代、移住者一世と二世—による見解の相違や現状認識の相違をすべて含め、本研究が示す雑多な総体が、学校教育導入以来大きく変化しつつある時代の転換期の多言語社会ブータンの現在であり、この60年間であるとして提示する。

第2に方法について、本研究は、先行研究がなく、したがってその実態が不明なブータンの一般の人たちの言語生活を量的調査と質的調査を併用し、3つの方法—質問紙調査・半構造化インタビュー調査・ナラティブ・インタビュー—を組み合わせることにより描き出す。質問紙調査は、先行研究が不在であり、したがってその実態が把握されていない対象を、学校教育・家庭生活・市場の経済生活の3つの領域で切り取り、各領域を象徴する属性ごとの全体的な傾向と概況を把握することを目的とする。半構造化インタビュー調査は、質問紙調査と同じインフォーマントを対象に質問紙調査と並行しておこなったものである。質問紙調査では掬い取れない、また対象者にとっては質問紙調査では伝えきれない、個人的な背景や事情、心情をその場で聴取することにより、質問紙調査を補完することを目的とした。さらにナラティブ・インタビューは、学校教育、家庭、市場経済の各領域に関連した個人に「語り」を依頼したものである。伝統的な地理的な言語の分布に加え、「4言語方針」を採る現在のブータンでは、言語の社会機能的すみ分けとして、学校、行政、宗教、家庭と、それぞれの領域で使用を前提とされる言語が異なる、しかしながら、一個人は、それらの複数の領域に跨って日々生活し、生涯を送っていく。たとえば、ある東部に赴任した、ある中央部出身の学校教師は、自宅では自身の第一言語であるブムタンカ語（中央部の民族語）を用いていても、職場ではゾンカ語で同僚の先生方と話し、授業は英語でおこなう、そして地域では東部地域のリングフランカであるシャージュプカ語を用いて生活する。また生涯的視点からは、家庭生活が中心であった幼少期には自身の第一言語が中心的な言語であっても、その後就学するとゾンカ語と英語が学生時代の中心的な言語となる。そして就職して地方へ赴任したり、結婚して家庭生活の比重が高くなる等、人生の各ステージで中心となる生活領域が変化し、それに伴い使用言語も、言語能力も、さらには言語の情緒的位置づけも変化していくことになる。ナラティブ・インタビューでは、そうした個人の、複数領域を跨いだ日々の生活と、現在に至るまでの人生の過程との関係性も含めて、共時的視点と通時的視点を融合させた総合的な視点から多言語社会を生きる複言語話者の多言語生活と人生を明らかにすることを目的とする。さらに本研究が語りを依頼した語り手は、下は7歳、上は70代である。また同じ年代でも、高等教育を受け現在自身が教壇に立つようになった人から、教育を受ける機会を得なかった人、あるいは学齢期には受ける機会がなく成人して学習に臨む決意をした人等、多岐に及ぶ。本研究は、3つの手法を組み合わせることにより、時代の転換期にあるブータンの多言語社会と複言語話者の言語生活と言語認識を大局的に把握しつつ、ミクロへの視点も加味した叙述を可能とした。

第3に、本研究の最大の意義は、現在という時期を対象としてことである。ブータンにおいて現在は、2つの意味で時代の転換期にある。第1は学校教育の拡充という意味、第2は国民の全国的な移動と異なる民族の混在化という意味においてである。第1の教育の拡充について、1961年における学校教育の本格的導入から60年、現在ブータンは、教育を受けた経験のない民族語モノリンガルの祖父母世代と、教育を受けた人と受けない人が混在する親世代、教育を受けることが「あたりまえ」となり英語とゾンカ語が生活の中心となりつつある孫世代という、言語生活と言語認識の大きく異なる三世代が一つ屋根に暮らす、ブータンの歴史上最初で最後の過渡期にある。そして本研究がブータ

ンで実施した家庭言語調査からは、共に新しい時代に対応する親と子の相互作用と「双方向性の言語社会化過程」(Ochs and Schieffelin 2012)が生み出した一家庭3言語という高い複数言語率と、祖父母世代と子ども世代をつなぐ中継世代の親の、「仲介者」としての役割認識と機能が明らかになった。また、第2の国民の移動と民族の混在について、ブータンで人びとの全国的な移動が社会問題化したのは1990年代である。全国から大量の国内移住者が流入し、その割合が住民の85%に達しようという現在のティンブーは、移住者一世から移住者二世の時代となりつつある。地方の民族地区で生まれ、学校教育を受ける機会もなくティンブーに移住した移住者一世の多くは、ゾンカ語を地域言語とするティンブーにおける新しい生活のなかでゾンカ語を習得することで都市生活に適応し、「ティンブー市民」としての新たなアイデンティティを築いてきた人たちである。一方、移住者二世は家庭では親の民族語を用いながらも学校教育と地域生活を通じて英語とゾンカ語を第一言語同然に習得し、教育を受けた若者として英語を基盤とするアイデンティティをもつ。地方の農村部から都市部への国内移住者の流入は今後も続くであろうが、今後は、地方で学校教育を受け、移住当初からゾンカ語が可能な移住者へと移住者像が変化していくことが予想される。本研究が現在のティンブーの下町市場で観察した、ゾンカ語ができない大量の国内移住者とそれを受け入れるホストコミュニティ双方の歩み寄りの言語社会化とそれが生み出した「第3の媒介語」や、ゾンカ語ができない新来移住者を助け、ホストコミュニティとの間を取り持つ中堅移住者の「仲介者」としての役割認識と機能は、時代の転換期にある多言語社会独自の言語社会化の在り方である。

本研究は、先行研究において対象とされてこなかった空白を多角的な方法で埋め、学校教育の普及の大きな過渡期にあったこの60年間と現在を叙述した記録である。時代の転換期という時代性を強く反映した、多言語社会における複言語話者の独自の言語社会化過程を明らかにした研究として意義があると考えられる。

5. 本論文の構成と概要

本論文は、本研究の問題意識と目的を示す第I部「序論 多言語社会ブータン」と、本研究がブータンにておこなった実地調査の結果と分析、考察を示す第II部「学校教育と言語」、第III部「家庭と言語」、第IV部「市場と言語」、第V部「ある移住者一家の物語」の4つの部、および本研究の結論と今後の課題を示す第VI部「結論 多言語社会における複言語話者と言語」の全6部、40章で構成される。以下、各部の研究課題と構成、および概要を示す。

第I部 「多言語社会ブータン」 (第1章～第8章)

第I部「序論 多言語社会ブータン」では、本研究全体の目的と研究課題を示し、理論的枠組みである「言語社会化論」(Ochs & Schieffelin 2012)について概説する。さらに本研究が調査から得た結果を、「言語社会化論」の立場からどの点に着目して分析、考察していくかの指針を述べる(第2章)。続いてブータンの社会文化的背景を、民族構成、文化、宗教、言語状況、「ブータン人」の概念の5つの点について概説し(第3章)、ブータンにおける言語政策の展開、および現状に対する時代や立場の異なる視点からの見解を比較する(第4章)。そして先行研究を概観し(第5章)、本研究が対象とする時代の転換期における新しい多言語社会と複言語話者について概説し(第6章)、本研究がおこなった一連の調査の概要を示す(第7章)。最後に、本研究全体を通して留意すべき用語の定義をおこなう(第8章)。

第II部 「学校教育と言語」 (第9章～第17章)

第II部「学校教育と言語」では、学校教育の「内側」にいる人たち—学生、現役教師、保護者—と、この学校教育拡充の60年間、その「外側」にいたその他の大勢の人たちからみた、現行の学校教育およびその制度に対する認識を明らかにする。そして学校教育を受けた人と受ける機会がなかった人も含めて、学校教育が人びとにどのような影響を与えているか、その影響を当人たちがどのように認識しているかに着目する。

はじめに第II部の問題意識、目的、研究課題を述べたあと(第9章)、世界における多言語教育の目的や類型、動向、先行研究を概観し、ブータンの現行の学校教育制度について説明する(第10章)。以降の5つの章は、学校教育に関連して本研究がブータンにておこなった現地調査の結果と

分析である。最初に、学校教授言語としての英語の導入（第 11 章）と、その英語が学校教育を超え、若者を中心に受容され浸透している状況を、英語借用語を中心に考察する（第 12 章）。続いて、学校教育における民族言語・民族文化の位置づけについて世界の多言語国家の動向と比較しながらブータンの現状を現場の教師の声を交えて考察する（第 13 章）。そのあとブータンの学校寮制度が与える影響を若者のアイデンティティ形成と民族語継承の 2 つの点から、寮生や保護者の見解も交えて検証する（第 14 章）。最後の 2 つの章では成人を対象としたノンフォーマル教育を取り上げる。都市部と地方農村部を対象とした調査に基づき、教育を受ける機会がないまま母となった女性たちが現在、教育に何を求め、文字の読み書きを習得した彼女たち個人の人生のみならず、家族と地域社会をどのように変えつつあるかを明らかにする（第 15 章）。さらにノンフォーマル教育に通う、ある農家の主婦の「語り」を分析する。語りの過程で変化していく女性の自己感から、成人を対象としたリテラシー教育におけるナラティブ・アプローチの方法論的体系化の可能性を模索する（第 16 章）。

第 II 部における学校教育に関する調査と考察からは、学校教育の拡充と、特に第 6 次五カ年計画における教育のブータン化をはじめとする政府の言語教育方針の転換を反映し、教育第一世代と第二世代の言語観、さらにはそれに基づくアイデンティティの位置付け方の相違が明らかになった。またノンフォーマル教育を対象とした調査からは、全国的共通語と読み書き能力を得た成人女性が家庭や地域社会の言語社会化を促し、「仲介役」を担うようになる過程が着目され、家庭の母であり、社会の主要な労働力層である成人が教育を受けることの社会的意義が明らかになった（第 17 章 第 II 部の結論）

第 III 部「家庭と言語」（第 18 章～第 23 章）

第 III 部「家庭と言語」では、教育第一世代として英語もゾンカ語も可能なブータン初の、言語選択肢をもつことになった知識人を親とする家庭における、親の家庭言語意識と実践に着目する。

はじめに第 III 部の問題意識と目的、研究課題を述べる（第 18 章）。そして、家庭バイリンガル研究の先行研究を概説したうえで、国民の全国的な移動の活発化と異言語話者間結婚の増加、それによる言語と地域の関係の希薄化が進む現在のブータンの家庭を取り巻く環境要因を分析する（第 19 章）。次に本研究がブータン現地にておこなった 2 つの異なるタイプの知識人家庭における家庭言語調査の結果を分析する。第 1 は、子どもをもつ全国の学校教師家庭である。「学校人」としてではなく、子どもをもつ親として、また言語民族の一員として、わが子の家庭言語と親の民族語の継承に向き合う親の意識と実践を明らかにする（第 20 章）。第 2 は、ブータン中央部の農村トンサに暮らす教師家庭と一般知識人家庭の比較調査である。前者が核家族での赴任であるのに対し、後者は代々その土地で暮らす三世代大家族である。家族を取り巻く環境の相違が与える影響、特に後者の家庭においては、三世代大家族の中継世代として言語背景が大きく異なる祖父母世代と孫世代という 2 つの世代を橋渡しする「仲介者」としての親世代の役割認識に着目する（第 21 章）。最後に地方農村部と都心という言語環境の異なるなかで初めての子育てをする 2 人の親が自身の子育てを振り返り、学校教育と家庭教育に対する思いや期待を語った「語り」を分析する（第 22 章）。

第 III 部における家庭言語に関する調査と考察からは、自身の民族の土地を離れて赴任し核家族で子育てに臨む教師家庭と三世代大家族で暮らす一般知識人家庭では、家庭言語に対する親の意識や実践に有意な相違があることが明らかになった。教師家庭の親からは、民族としてよりもまずは「ブータン人」としてわが子がゾンカ語と英語の十分な能力をもって育つことを願う傾向が示された。一方、一般家庭からは、教育経験と言語生活の異なる祖父母世代と子ども世代をつなぐ中継世代として「仲介役」を担うことを自らの役割とする親の認識と、親と子の相互作用による「双方向過程 (bidirectional process) としての言語社会化」(Pontecorvo and Sterponi 2001) が家庭の複言語化を促し、1 家庭平均 3 言語という高い複言語状況を生み出している現状が明らかになった（第 24 章 結論）。

第 IV 部「市場と言語」（第 24 章～第 31 章）

第 IV 部「市場と言語」では、ブータンの全国 9 つの多言語市場で展開する商人と客間のやり取りを対象に、売り手と買い手という市場独自の関係が言語選択にどのように関わるか、各市場が位置

する地域の地域性がそこにどのように関与するかを「市場」の論理」と「それぞれの市場」の論理」という2つの仮説を提唱して検証する。さらに現在、全国の民族地区から大量に流入した国内移住者が住民の約85%に達する首都ティンブーにおいて、市内各地区の市場で特徴的に示される言語状況を、移住者の社会化過程の進展に伴う都市内移動と集住、および言語社会化の相違から説明する。

はじめに第IV部の問題意識と目的、研究課題を明らかにし(第24章)、多言語社会における市場の言語、移住者の流入と都市の形成、言語切り替えと媒介機能、そして群居機能に関する理論と先行研究を概説する。さらにブータンの社会言語学的背景として全国の地方民族地区から首都ティンブーに大量に流入する国内移住者と、それに伴う都市開発と都市機能の郊外化、人びとのすみ分けの現状を説明する(第25章)。続いて本研究がおこなった多言語市場の言語調査を概説し(第26章)、ブータンの市場の全国的傾向を観察された使用言語と、インタビュー調査から明らかになった市場の商人と客の構成や第一言語等の統計資料から明らかにする(第27章)。特にブータンの典型的な市場の事例としてブータンの最古で最大の野菜市場である王制百周年記念市場を取り上げ、話者双方が異なる言語を用いる「相互乗り入れ型」(泉2009:44)の会話展開を検証する。そしてその特徴的な言語使用とそれを生み出す論理を「市場」の論理」として示す(第28章)。一方、全国的な市場の傾向から逸脱する2つの事例として、下町のホンコン・マーケットと表通りのメインストリートノルジン・ラムを取り上げ、「それぞれの市場」の論理」を実証する。ホンコン・マーケットでは、当市場で特徴的に観察される民族語の多用を「第3の媒介言語」として着目する。本研究では、それを、ホストコミュニティと移住者の歩み寄りによる「双方性過程(bidirectional process)としての言語社会化」(Pontecorvo and Sterponi 2001)が生み出した下町の共生の形として考察する(第29章)。ノルジン・ラムでは、移住者二世の若者たちにもみる独自の英語使用と、英語とゾンカ語の切り替えに着目し、英語が若者たちにとって「群居言語(vernacular)」(Calvet 1999)として機能していることを指摘する。そして「第二言語の言語社会化(second language socialization)」(Duff 2007)論から考察する(第30章)。

第IV部「市場と言語」からは、全国的な共通語・国語と地方民族語、ホストコミュニティの言語と移住者の言語というマクロな関係性とは異なる独自の「市場の論理」と、地域性を反映した「それぞれの市場の論理」があることが明らかになった。さらに全国の民族地区からの大量の国内移住者を迎えるティンブーにおいて、社会化過程に伴い都市内移動をおこなう移住者を「時間と空間を融合させる視点装置」として位置づけることにより、移住者の社会化過程に伴う言語使用の通時的な変化を、ティンブーの各地区で特徴的にみられる言語状況として空間的に布置し、共時的に示した。そして本来その存在が前提とされるはずの社会の規範が不明瞭な、時代の転換期ゆえの現在のブータンにおける独自の社会化の在り方を、「再帰的言語社会化(recursive language socialization)」という新たな概念として提唱した(第31章 第IV部 結論)。

第V部「ある移住者一家の語り」(第32章~37章)

第V部「ある移住者一家の語り」では、ブータン東部から単身ティンブーに移住し、英語通訳ガイドとしての道を拓いた一人の女性の語りを取り上げる。女性の語りは、ゾンカ語ネイティブ話者という自ら創造した「ティンブー人」像をめぐる、複数の言語と複数のアイデンティティの相克と相補の過程として展開する。「シャーショップ(東の人)」である自分は、どれほどゾンカ語が上達しても「ティンブー人」になれないというジレンマのなか、女性は、英語に活路を求め外国人を対象とするガイドになる。そして外国人客から自分が「東の人」でも「西の人」でもない「ブータン人」として捉えられ、ゾンカ語が「ブータン人の言葉」として「自分のネイティブ言語」として位置づけられるという経験を通し、彼女のなかで「シャーショップ(東の人)」、「ティンブー人」、「ブータン人」、そして「英語ガイド」という複層的な自己アイデンティティと、その基盤としての「シャーショップカ語」、「ティンブーの言語としてのゾンカ語」、「ブータンの国語としてのゾンカ語」、「英語」に対する意識が相克し合うようになる。本研究は、その後、家族をティンブーに呼び寄せ、移住者二世となるわが子を育てていくなかで、彼女のなかで4つの言語と4人の「わたし」が重層的に、補完的に「わたしの言語」となり、それらを基盤とする総体としての「わたし」となっていく過程を本人の「語り」から分析する。なお第V部では、女性の2人の息子たち

と、女性がティンパーで生活基盤を固めるまで東部で孫たちを育て家族を支えた祖母の語りも交え、「羅生門的手法」により、移住者一家の家族の語りとして総合させる。

第V部で語られる家族4人の語りは、「あるひとつの移住者家族の物語」であると同時に、教育第一世代と第二世代、移住者一世と二世の物語として、時代の転換期にあるブータン社会を映す「プリズム」(Miller, *et.al.* 2012: 190)としての作用をもつ。その意味で、それは時代の転換期である現在のブータンを象徴するものであり、第V部は、第I部から第IV部の総論としての位置づけにある。

第VI部「結論：転換期における複言語話者の言語社会化過程」(第38章～第40章)

第VI部「結論：転換期における複言語話者の言語社会化過程」では、本研究が対象とした学校、家庭、地域、そして個人のそれぞれの領域での調査研究から明らかになった言語社会化の諸相を振り返る(第38章)。そのうえで、本研究全体の結論として、時代の転換期にある多言語社会ブータンにおける複言語話者の独自の言語社会化過程について、3つ特徴を指摘する。第1はより積極的な意味での相互作用とそれによる第3の文化の創造、第2は古参者と新参者をつなぎ橋渡しする「仲介者」の登場とその役割認識、第3は社会化していく先の社会そのものが不透明で不安定な状況下で人びと自ら、自身が向かっていく先の社会像と、そこで自身が用いるべき言語像を規定し、そうすることで自身の行動の準拠枠とするとともにそれを不在の社会の規定として固定化していくという再帰的な言語社会化の過程である。本研究ではそれを「再帰的言語社会化(recursive language socialization)」と呼び、過渡期独自の過程を特徴づける新たな言語社会化モデルとして提唱する(第39章)。最後に、本研究の第15章、第16章でその可能性が示唆された成人識字教育におけるナラティブ・アプローチの体系化とアクション・リサーチの遂行、および本研究で提唱した言語社会化過程がはたしてブータン独自のものであるのか、それとも時代の転換期にある多言語社会におけるひとつのモデルとして提示可能なものであるのか、他地域との比較研究を今後の課題として挙げる(第40章)。

6. 今後に向けた課題

以下、本論文で及ばなかった点とそれを踏まえた今後の課題を特に3点に絞り、挙げる。

第1は、視点の転換である。本論文は、ブータン全国に暮らす年代や教育経験の異なるさまざまな人たちの現在と、学校教育導入以来の60年間を中心とする言語認識と言語実践の変化を、4つの異なる領域から切り取ったものである。そのすべてがそれぞれの現実であり、真実である一方で、これがすべてではないことを承知しておく必要がある。また、今回は、それぞれがなぜそのような現実(像)を抱くに至ったのか、個々人、あるいは属性ごとに切り取られた現状とそこに至る経過を共時的視点と通時的視点から描き、それらを一挙に並置して示すに留まった。その横並びの相違における有機的な関係性への思索や、混在と過渡期的な状況のなかで彼らをブータン人としてつなぐものの存在や、彼らがどのような総体的な国民像を抱き、求めているかへの十分な思索にまで至らなかった。ブータンの場合、それは言語とは別のところに存在するのかもしれない。今回は、言語から人びとの生活を切り取った。今後は視点を切り替え、言語も含めた生活全体からの言語生活の位置付けも加味して双方向から言語と生活を捉えていく必要がある。

第2は、比較文化的視点の導入である。今回本研究が提示した、過渡期の多言語社会における複言語話者の言語社会化過程の3つの特徴的な在り方—1)「双方性過程としての言語社会化」(Pontecorvo and Sterponi 2001)とそれによる第3の文化の創造、2)古参者と新参者をつなぎ橋渡しする「仲介者」の登場とその役割認識、3)社会化していく先の社会が不安定で半ば不在の状況下で個々人自ら自身が向かっていく先のあるべき言語像を規定し、そうすることで自身の行動の準拠枠とするとともにそれを不在の社会の規定として固定化していくという「再帰的言語社会化過程」—が、はたして現在のブータン独自のものであるのか、それともそのほかの地域、文化の過渡期的状況においても同様な言語社会化の在り方が観察され、これを時代の転換期における言語社会化のひとつのモデルとして提示可能なものであるのか、本論文ではブータン以外の地域研究を参照するまでに至らなかった。今後、他地域における先行研究を参照するとともに筆者自身による調査の敢行も視野に入れ、比較研究を進めていく必要がある。

第3は、アクション・リサーチへの取り組みである。本論文の第15章と第16章で取り上げたブータンのノンフォーマル教育について、今後は、アクション・リサーチとして積極的に現地の教育と関わっていく。その柱のひとつとなるのが、本研究では調査方法として用いたナラティブ・インタビューを、リテラシー教育におけるナラティブ・アプローチとして体系化していく試みである。Miller, *et.al.* (2012: 190) が提唱する、「メカニズム (仕組み)」としての語りの作用に着目し、語るという行為、および体験を通して自己認識をより肯定的なものへと書き換えるという、物語の「創造性」(桜井 2012: 90) をリテラシー教育に取り入れていくものである。学校教育普及の過渡期に農村に生まれ、土地を離れることなく生きてきた女性たちの多くが急速に変化する社会のなかで個としての自分「わたし」を見出せないまま、一種の「置いてきぼり感」ともいえる否定的な自己観を抱えている。文字の読み書きを学び、全国共通語を習得することが「わたし」の発見と、より肯定的な自己観の創造へつながる体験となるよう、ナラティブ・アプローチの方法論的体系化をめざす。

本論文は、筆者がいかなる組織にも属さず、個人として調査に臨み、ブータンと向き合った結果である。それゆえ見えてきた世界がある一方で、外国人に対する規制が厳しいブータンにあって、さらに深く、広い調査をおこなっていくためには限界もある。今後は、ブータン国内外の研究組織やブータン政府、および現場の教育育関係者との連携と共同の取り組みを進めていく所存である。

総目次

論文要約	i
目次	VII
1. 目次	VII
2. 図表目次	XXV
3. 資料目次	VXII
第 I 部 序論 多言語社会ブータン	1
第 1 章 本研究の問題意識と目的	3
第 1 節 本研究の問題意識	3
第 2 節 本研究の目的と研究課題	6
第 3 節 本研究の構成と各部の概要	7
第 2 章 理論的枠組み	13
第 1 節 言語社会化論	13
第 2 節 ホリスティックなバイリンガリズム観	19
第 3 節 語り	20
第 3 章 ブータンの社会文化的背景	23
第 1 節 民族構成	24
第 2 節 文化	24
第 3 節 宗教	25
第 4 節 「ブータン人」像	26
第 5 節 言語状況	28
第 4 章 ブータンにおける言語政策	35
第 1 節 言語政策とは何か	35
第 2 節 ゾンカ語の国語化計画	37
第 3 節 現状に対する認識	40
第 5 章 転換期の多言語社会ブータン	43
第 1 節 新しい多言語社会と複言語話者	43
第 2 節 首都ティンプーの現状	45

第6章	先行研究	47
第1節	教育政策研究と五ヵ年計画	47
第2節	そのほかの教育関連の先行研究	48
第3節	方法的問題について	48
第7章	調査の概要	51
第1節	調査の経緯	51
第2節	本調査	53
第3節	学校教育機関調査	55
第8章	用語の定義	60
第II部	学校教育と言語	61
第9章	第II部「学校教育と言語」序論	63
第1節	第II部「学校教育と言語」の問題意識	63
第2節	第II部「学校教育と言語」の目的	64
第3節	第II部「学校教育と言語」の研究課題と着眼点	65
第4節	第II部「学校教育と言語」の構成	68
第10章	世界の動向とブータンの学校教育制度	69
I	世界の言語・教育の動向	69
第1節	多言語に対する3つの考え方—問題・権利・資源	69
第2節	バイリンガル教育	74
第3節	多文化・多言語主義と多文化・多言語教育	79
II	ブータンの学校教育制度	84
第4節	ブータンにおける学校教育制度の歴史的展開	84
第5節	現行の学校教育制度	92
第6節	教育カリキュラム	97
第7節	教育における「平等」の概念	98
第8節	第10章「世界の動向とブータンの学校教育制度」のまとめ	101
第11章	学校教授言語の選択—「望ましい教授言語」	103
第1節	第11章「学校教授言語の選択」序論	103
第2節	先行研究—母語教育とアジアの動向	105

第3節	ブータンにおける教授言語として英語の導入とその後	110
第4節	調査Ⅰ 学校教師・学生を対象とした調査 概要	113
第5節	調査Ⅰ 結果	116
第6節	調査Ⅱ 一般人・保護者を対象とした調査 概要	125
第7節	調査Ⅱ 結果	127
第8節	考察	129
第9節	第11章「学校教授言語の選択」結論	130
第12章	調査：英語の受容と広まり—英語借用語の使用と認識	133
第1節	第12章「英語の受容と広まり」序論	133
第2節	先行研究—借用語	135
第3節	ブータンにおける英語借用語をめぐる状況	138
第4節	調査の概要	141
第5節	調査結果	142
第6節	考察	157
第7節	第12章「英語の受容と広まり」結論	161
第13章	学校教育における民族語	163
第1節	第13章「学校教育における民族語」序論	163
第2節	ブータンの背景—教員への期待と「教職」という立場	165
第3節	調査Ⅰ 全国の教師対象調査	169
第4節	調査Ⅰ 結果	171
第5節	調査Ⅱ 地方赴任教師の個別インタビュー	180
第6節	調査Ⅱ 教職志望生らによるフォーカスグループ・ディスカッション	182
第7節	考察	184
第8節	第13章「学校教育における民族語」結論	187
第14章	学校寮制度—若者のアイデンティティ形成と民族語継承	191
第1節	第14章「学校寮制度」序論	191
第2節	先行研究 言語教育政策と学校寮	193
第3節	ブータンにおける学校寮の背景状況	195
第4節	調査Ⅰ 学校寮と若者のアイデンティティ—概要	200
第5節	調査Ⅰ 結果	204
第6節	調査Ⅰ 考察	217

第7節 調査Ⅰ 小括	220
第8節 調査Ⅱ 民族語・民族文化の継承とその認識 概要	221
第9節 調査Ⅱ 結果(1) 学生を対象とした質問(A)	223
第10節 調査Ⅱ 結果(2) 両親を対象とした質問(B)	231
第11節 調査Ⅱ 考察(1) 「文化の継承」をめぐる学生の見解をめぐって	236
第12節 調査Ⅱ 考察(2)	239
第13節 第14章「学校寮制度」 結論	241
第15章 調査：ノンフォーマル教育と女性たち	243
第1節 第15章「ノンフォーマル教育と女性たち」 序論	243
第2節 理論的枠組み—成人の「第二言語の言語社会化」	245
第3節 成人識字教育の展開と「読み書きができる」ということ	246
第4節 ブータンにおける成人識字教育	250
第5節 ブータンの言語／社会的背景	254
第6節 調査Ⅰ：ティンプーにおけるノンフォーマル教育	257
第7節 調査Ⅱ：中央部におけるノンフォーマル教育	271
第8節 第15章「ノンフォーマル教育と女性たち」 結論	286
第16章 語り：ある農村女性の語り	
—リテラシー教育におけるナラティブ・アプローチの方法論的可能性	291
第1節 第16章 「ある農村女性の語り」 序論	291
第2節 ナラティブ・アプローチとリテラシー	293
第3節 調査の概要	295
第4節 Eさんの家族背景と語りの概要	296
第5節 分析の方法と着眼点	299
第6節 分析	300
第7節 考察	308
第8節 第16章 「ある農村女性の語り」 結論	311
第17章 第Ⅱ部「学校教育と言語」 結論	315
第Ⅲ部 家庭と言語	321
第18章 第Ⅲ部「家庭と言語」 序論	323
第1節 第Ⅲ部「家庭と言語」の問題意識	323

第2節	第III部「家庭と言語」の目的	324
第3節	第III部「家庭と言語」の構成	325
第19章	先行研究・ブータンの社会／言語的背景	327
I	先行研究	327
第1節	複数言語家庭における家庭語選択	328
第2節	バイリンガル研究の展開	330
第3節	言語の社会的位相と家庭言語の選択	332
II	ブータンの家庭言語の社会／言語的背景	333
第4節	国民の全国的移動と〈言語-地域〉関係の希薄化	334
第5節	「教育第一世代」であるということ	334
第6節	異民族間結婚の増加とそれが家庭言語について示唆する意味	337
第7節	政府調査 2015 GNH SURVEY REPORT (CBS 2016)	338
III	仮説の提起と研究課題	342
第8節	仮説の提起〈マクロ-メゾ-ミクロ〉の3構造・〈メゾ〉の2層性・〈ミクロ〉の2段階性	342
第9節	研究課題	345
第20章	全国学校教師家庭 両親の家庭言語意識と実践	349
第1節	第20章「全国学校教師家庭 両親の家庭言語意識と実践」 序論	349
第2節	調査概要	350
第3節	調査Ⅰ 家庭環境要因の分析	351
第4節	調査Ⅱ 家庭言語意識	359
第5節	調査Ⅲ 学校教師家庭 言語実践	376
第6節	第20章「全国学校教師家庭 両親の家庭言語意識と実践」	396
第21章	地方在住知識人家庭 両親の家庭言語意識と実践	403
第1節	第21章「地方在住知識人家庭 両親の家庭言語意識と実践」 序論	403
第2節	調査概要	404
第3節	調査Ⅰ 家庭環境要因の分析	405
第4節	調査Ⅱ 家庭言語意識	410
第5節	調査Ⅲ 地方知識人家庭の家庭言語実践	417
第6節	ある地方民族地区でのエピソード	431
第7節	第21章 「地方在住知識人家庭 両親の家庭言語意識と実践」 結論	433

第 22 章 2 人の両親の語り 「ブータン人」であることと「正しいゾンカ語」	435
第 1 節 第 22 章「2 人の両親の語り」 序論	435
第 2 節 教師のライフストーリー研究	438
第 3 節 調査の概要	438
第 4 節 調査結果 (1) 教師 A 家庭	441
第 5 節 調査結果 (2) 講師 B 家庭	453
第 6 節 考察	462
第 7 節 第 22 章「2 人の両親の語り」 結論	465
第 23 章 第Ⅲ部「家庭と言語」結論	467
第 IV 部 市場と言語	471
第 24 章 第 IV 部「市場と言語」序論	473
第 1 節 第 IV 部「市場と言語」の問題意識	473
第 2 節 第 IV 部「市場の言語」の目的	474
第 3 節 第Ⅲ部「市場と言語」の構成	474
第 25 章 先行研究・ブータンの市場の社会／言語的背景・仮説の提起	475
I 先行研究	475
第 1 節 「市場」とは何か	476
第 2 節 「都市」とは何か・「移住者」とは何か	480
第 3 節 「多言語会話」とは何か—言語の切り替えと複数言語の併用	485
II ブータンの市場の社会／言語的背景—市場・移住者・都市開発	490
第 4 節 国内移住者の流入とブータンの産業構造	490
第 5 節 ティンプーの都市開発と移住者の住み分け	492
第 6 節 現在の「移住者像」	494
III 仮説の提起	496
第 7 節 メゾ構造「市場」の 2 つの論理	496
第 8 節 研究課題	497
第 26 章 市場調査の概要	499
第 1 節 調査期間	499
第 2 節 対象市場	499

第3節	調査の着眼点と方法	503
第27章	全国調査結果	507
第1節	第27章「全国市場調査」 序論	507
第2節	市場の地域性	510
第3節	話者の言語背景	515
第4節	言語使用	525
第5節	第27章 「全国市場調査」 結論	541
第28章	総合野菜市場 王制百周年記念市場—多言語市場の会話展開	545
第1節	第28章「総合野菜市場 王制百周年記念市場」 序論	545
第2節	「切り替え」の発生	547
第3節	ブータン最大の野菜市場 王制百周年記念市場	538
第4節	王制百周年記念市場における「切り替え」の発生状況	549
第5節	会話展開のパターン	556
第6節	第28章「総合野菜市場 王制百周年記念市場」 結論	569
第29章	下町市場 ホンコン・マーケット	
	—地方民族移住者とホストコミュニティの歩み寄りの言語選択—	573
第1節	第29章「下町市場 ホンコン・マーケット」 序論	573
第2節	新来移住者の集住地区ホンコン・マーケット	576
第3節	調査の概要	578
第4節	調査Ⅰ 使用言語・認識分析 結果	579
第5節	調査Ⅰ 考察	590
第6節	調査Ⅰ 小括	600
第7節	調査Ⅱ 「言語の切り替え」分析 結果	601
第8節	調査Ⅱ 考察	613
第9節	第29章「下町市場 ホンコン・マーケット」 結論	614
第30章	メインストリート ノルジン・ラム—移住者二世の若者たちと英語	617
第1節	第30章「メインストリートノルジン・ラム」 序論	617
第2節	調査の概要	619
第3節	調査Ⅰ 結果 使用言語・認識分析	621
第4節	調査Ⅱ 結果 「言語の切り替え」	633

第5節	調査 II 言語の切り替えからみる英語の「群居機能」	638
第6節	調査 II 考察	643
第7節	第30章「メインストリートノルジン・ラム」 結論	644
第31章	第IV部「市場の言語」結論	647
第V部	ある移住者一家の語り	659
第32章	第V部「ある移住者一家の語り」序論	661
第1節	第V部「ある移住者一家の語り」の問題意識	661
第2節	第V部「ある移住者一家の語り」の方法	664
第3節	第V部「ある移住者一家の語り」の目的	665
第4節	第V部「ある移住者一家の語り」の研究課題	665
第5節	第V部「ある移住者一家の語り」の構成	666
第33章	「羅生門語り」ブータンの背景・調査概要	667
第1節	「羅生門的手法」	667
第2節	ブータンの社会／言語的背景	670
第3節	調査の概要	672
第34章	「現在」についての語り	679
第1節	Cさんの語り	679
第2節	長男Tの見解	683
第3節	次男Nの見解	685
第4節	祖母Gさんの見解	686
第5節	「現在」についての語り—まとめ	687
第35章	「振り返り」の語り	689
第1節	Cさんの振り返り	689
第2節	長男Tの振り返り	699
第3節	祖母Gさんの語り	702
第4節	「振り返り」の語り—まとめ	703
第36章	「移住」をめぐる語り	705
第1節	祖母Gさんにとっての「移住」	705

第2節	次男Nにとっての「移住」	706
第3節	長男Tにとっての「移住」	707
第4節	Cさんにとっての「移住」	708
第5節	「移住」をめぐる語り—まとめ	710
第37章	第V部「ある移住者一家の語り」結論	711
第VI部	結論 転換期の多言語社会における複言語話者の言語社会化	717
第38章	各部のまとめ	719
第39章	結論	723
第40章	今後の課題	725
引用文献		引用文献 1
資料		資料 P. 1
資料 1	調査承諾書	資料 P. 3
資料 2	インフォーマント	資料 P. 5
資料 3	調査質問項目	資料 P. 7
資料 4	調査結果資料	資料 P. 39
資料 5	論文目録	資料 p. 53

謝辞

図表目次

第 I 部 序論 多言語社会ブータン	1
表 1 民族言語別人口統計	
表 2 Haugen (1982) のモデル	
表 3 ブータンにおける両親の結婚形態 (言語の組み合わせ)	
図 1 全体の構想: 共時的視点と 2 つの時間軸による通時的視点の導入	
図 2 文化の文脈と個々の状況	
図 3 外在する文化としての「意味の網目」が、相互作用により内在化し、「無意識の行動パターン」を形成し、「文化」は「行動の準拠枠」として機能していく。	
図 4 ブータンにおけるマクロな文脈と個々の状況の関係性	
図 5 家庭と地域社会において、古参者 (祖父後・ホストコミュニティ) と新参者 (子ども・新来移住者) をつなぐ「仲介者」としての役割を担う、親世代と中堅移住者の存在。	
図 6 時代の転換期にあるブータンの首都ティンプーの状態—社会化する社会が不明瞭な状況での社会化	
図 7 ブータン周辺図 (平山 2016: 163, 図 1 より引用)	
図 8 ブータンの地区 (districts) (Dorjee 2014: 89 より引用) (Accessed on: 4 August 2020)	
図 9 Major languages of Bhutan	
図 10 伝統的な多言語社会・複言語話者から新しい多言語社会・複言語話者へ	
図 11 大量の国内移住者の流入で変化する首都ティンプーの言語状況	
第 II 部 学校教育と言語	61
第 10 章 ブータンの学校寮制度	69
表 1 ブータンの教育制度 1	
図 1 ブータンの学校教育体系図	
第 11 章 教授言語の選択	103
表 1 インフォーマントの所属の内訳	
表 2 インフォーマントの居住地と生育地	
表 3 「平等性」と「アイデンティティ」の基準によって選択される言語と支持者	
図 1 英語による授業の理解度	
図 2 英語による授業の困難	
図 3 ゾンカ語学生対象「望ましい教授言語」	
図 4 民族語学生対象「望ましい教授言語」	
図 5 「望ましい教授言語」の選択基準	
図 6 基準 (1) 実用性	
図 7 基準 (2) 平等性	
図 8 基準 (3) アイデンティティ	
図 9 基準 (4) 実行可能性	
図 10 ゾンカ語圏高校生出身家族形態	
図 11 ゾンカ語圏高校生の家庭言語	

図 12 同 親子間言語	
図 13 在住言語圏別高校生「望ましい教授言語」の見解	
図 14 調査 II インフォーマント 現住所と出身地域	
図 15 調査 II インフォーマント 学歴	
図 16 使用可能言語（中級以上）	
第 12 章 英語の広まりと受容	133
表 1 社会全体としての今後の対応	
表 2 英語借用語、外国技術、外国人の流入 総合 (大学生)	
表 3 英語借用語、外国技術、外国人の流入 総合 (高校生)	
表 4 英語借用語、外国技術、外国人の流入 総合 (教師)	
図 1 質問 1 英語借用語の使用の現状 (1)	
図 2 今後 (2) についての認識	
図 3 質問 2 英語借用語の自身の使用 (1)	
図 4 他人の使用 (2) に対する意識	
図 5 質問 3 (1) 英語借用語の増加に対する賛否	
図 6 質問 5 (1) 「個人として今後の英語借用語への対応」	
図 7 質問 6 外国の影響—(1)技術,	
図 8 (2) 人的交流 (属性別)	
図 9 質問 6 外国からの影響—(1) 外国からの技術,	
図 10 (2) 人的交流 (大学生—大学別)	
第 13 章 学校教育における民族語	163
表 1 言語圏別 教師 (所在地域 都市)	
表 2 学校教育カリキュラムへの民族語教育の導入の必要性	
表 3 学校教育カリキュラムへの民族文化教育の導入の必要性	
表 4 母語能力	
図 1 地域別学校教師の出身地	
図 2 教師の年齢	
図 3 個人として民族語・民族文化を学ぶ意志	
図 4 一般論として教師が生徒の言語を学ぶ必要性	
図 5 年齢別 個人として民族語・民族文化を学ぶ意志	
図 6 一般論として教師が生徒の言語を学ぶ必要性	
図 7 教師を対象とする民族語・民族文化研修の必要性	
図 8 学校教育カリキュラムへの民族語教育の導入の必要性	
図 9 学校教育カリキュラムへの民族文化教育の導入の必要性：「必要あり」の回答	
第 14 章 学校寮制度	191
表 1 第一言語の組合せ	
図 1 寮付設の学校数と寮生の数	
図 2 学生の居住形態	
図 3 学校教師以外の学校職員（食堂購買スタッフ）との使用言語	
図 4 自宅生と寮生の比較 現在の使用頻度	
図 5 自宅生と寮生の比較将来の言語生活	
図 6 国民アイデンティティと民族アイデンティティ	

- 図 7 内的同一性と外的同一性
- 図 8 「国民アイデンティティ」「民族アイデンティティ」と言語の関係性についての認識
- 図 9 「国民アイデンティティ」の根拠となる言語
- 図 10 「民族アイデンティティ」の根拠となる言語
- 図 11 大学生
- 図 12 高校生
- 図 13 質問 A2 民族語の継承の意識
- 図 14 「継承できた」「継承できなかった」という認識の基準
- 図 15 民族文化の継承の意識
- 図 16 学校寮制度と民族語・民族文化の継承の関係についての意識
- 図 17 質問 B1 (1) わが子への民族言語・文化継承の意思
- 図 18 質問 B1 (2) わが子への民族言語文化継承の実践
- 図 19 質問 B2 (1) 「わが子が自宅生だったら」
- 図 20 質問 B2 (2) 寮制度は民族言語文化継承の弊害か
- 図 21 「もし自分が自宅生だったら」

第15章 ノンフォーマル教育と女性たち..... 243

- 表 1 ティンパー校 性別
- 表 2 ティンパー校 結婚歴, 子どもの有無
- 表 3 ティンパー校 質問 2 頻出語彙
- 表 4 ティンパー校 質問 3 頻出語彙
- 表 5 中央部校 性別
- 表 6 中央部校 結婚歴, 子どもの有無
- 表 8 中央部校 質問 2 頻出語彙
- 表 9 中央部校 質問 3 頻出語彙

- 図 1 識字率の変化 男女別・地域別 (都市部・農村部)
- 図 2 就学経験の有無について 2005年から2017年の変化
- 図 3 ティンパー校 年齢の内訳
- 図 4 ティンパー校 学生の出身地域
- 図 5 ティンパー校 学生第一言語
- 図 6 ティンパー校 ティンパーでの在住年月
- 図 7 ティンパー校 質問 2 共起ネットワーク図
- 図 8 ティンパー校 質問 2 3つの主要カテゴリーと8つのサブカテゴリー
- 図 9 ティンパー校 質問 3 共起ネットワーク図
- 図 10 ティンパー校 質問 3 4つのテーマと5つのサブカテゴリー
- 図 11 中央部校 年齢
- 図 12 中央部校 学生出身地
- 図 13 中央部校 学生第一言語
- 図 14 中央部校 質問 2 共起ネットワーク図
- 図 15 3つのテーマと6つのサブカテゴリー
- 図 16 中央部校 質問 3 共起ネットワーク図
- 図 17 4つのテーマと9つのサブカテゴリー

第16章 ある農村女性の語り..... 291

表 1	語り手: Eさんの家族背景	
表 2	A/B 共通して 2 回以上出現した語 17 語	
表 3	A, B どちらかのみで 2 回以上出現した語 (A 19 語, B 22 語)	
表 4	テーマ, サブカテゴリー とその構成語句一覧	
図 1	語り前半【A】 共起ネットワーク図	
図 2	語り後半【B】 共起ネットワーク図	
図 3	Eさん 前半【A】 語りの展開—テーマとサブカテゴリー	
図 4	Eさん後半【B】 語りの展開とサブカテゴリー	
図 5	Eさんの世界の変化	
第 III 部	家庭と言語	321
第 19 章	ブータンの家庭の社会言語背景	327
図 1	現在就学年齢の子どもの両親世代 (20 代から 50 代) の識字率	
図 2	同 (男女別)	
第 20 章	全国学校教師家庭	349
表 1	両親の結婚形態 (言語の組み合わせ) 家庭 (%)	
表 2	両親の結婚形態別子どもの年齢の内訳	
表 3	両親間の使用言語	
表 4	親子間の使用言語 (子どもの全年齢)	
表 5	親子間の使用言語 (子どもの年齢別—現在年齢 5 歳以下と 6 歳以上)	
表 6	回想: 親子間の使用言語 (現在 6 歳以上の子どもが 5 歳以下の時)	
図 1	両親の英語・ゾンカ語能力	
図 2	言語圏別両親の結婚形態 ゾンカ語圏	
図 3	非ゾンカ語圏	
図 4	現在の赴任地域別教師の出身地域	
図 5	親の出身地と現在の居住地との関係	
図 6	家族構造	
図 7	親戚との接触頻度	
図 8	家庭内言語とその選択についての両親の意識 (子どもの全年齢)	
図 9	家庭内言語とその選択について両親が初めて意識した時期	
図 10	家庭内言語とその選択についての両親の意識 (子どもの年齢別集計)	
図 11	親の民族語の継承についての両親の意識	
図 12	わが子に最も習得を望む言語	
図 13	民族語継承の責任の所在についての親の認識	
図 14	夫婦間の使用言語 (総合)	
図 15	夫婦間使用言語 (言語別 英語と民族語)	
図 16	夫婦間使用言語 複数言語率	
図 17	親子間の使用言語 (子どもの全年齢)	
図 18	親子間言語 現在の状況の比較 5 歳以下と 6 歳以上 (英語)	
図 19	親子間言語現在の状況の比較 5 歳以下、6 歳以上 (民族語)	
図 20	5 歳以下/6 歳以上 複数言語率の比較	
図 21	夫婦間使用言語 (英語と民族語)	
図 22	親子間使用言語 (全年齢) (英語と民族語)	
図 23	夫婦間・親子間 複数言語率	

- 図 24 回想：親子間の使用言語（現在 6 歳以上の子どもが 5 歳以下の時）
- 図 25 夫婦間の使用言語 言語別
- 図 26 親子間使用言語 言語別（全年齢）
- 図 27 5 歳以下から 6 歳以上へ 子どもの年齢による親子間言語使用の変化
- 図 28 かつての 5 歳家庭と現在の 5 歳家庭への親の年代による変化

第 21 章 地方在住知識人家庭 403

- 表 1 両親の結婚形態
- 表 2 子どもの年齢別：結婚形態別内訳
- 表 3 子どもの年齢別 ゾンカ語と英語における教師家庭と一般家庭の差
- 表 4 同じ家庭の 5 歳から 6 歳への変化率
- 表 5 変化率：親の世代による変化
- 表 6 教師家庭と一般家庭の差

- 図 1 父親と母親の学歴と英語・ゾンカ語能力
- 図 2 父親と母親のゾンカ語・英語能力
- 図 3 現在の居住地と両親の出身地との関係
- 図 4 家族構造
- 図 5 親戚との接触頻度（教師家庭）
- 図 6 同（一般家庭）
- 図 7 家庭内言語（選択・計画）に対する親の意識の有無（全年齢）
- 図 8 家庭内言語に対する親の意識の有無（年齢別）
- 図 9 意識した時期（全年齢）
- 図 10 一般家庭 意識した時期 年齢別内訳
- 図 11 両親間の使用言語（全年齢）
- 図 12 一般家庭両親間の言語使用 子どもの年齢別内訳
- 図 13 教師家庭と一般家庭 親子間（全年齢）
- 図 14 教師家庭 夫婦間－親子間 使用言語比較
- 図 15 一般家庭 夫婦間－親子間 使用言語比較
- 図 16 現在 5 歳以下 親子間使用言語
- 図 17 現在 6 歳以上 親子間使用言語
- 図 18 現在 6 歳以上の子どもをもつ家庭の 5 歳以下のときの状況
- 図 19 教師家庭 回想による 5 歳以下の状況と現在の 6 歳以上の状況比較
- 図 20 一般家庭 回想による 5 歳以下の状況と現在の 6 歳以上の状況比較
- 図 21 教師家庭 回想による 5 歳以下と現在の 5 歳以下の比較
- 図 22 教師家庭 回想による 5 歳以下と現在の 5 歳以下の比較

第 22 章 2 人の両親の語り 435

- 表 1 インフォーマントの家族構成と背景情報
- 表 2 教師 A 家庭内と家庭外での使用言語
- 表 3 教師 A 頻出語彙
- 表 4 教師 A 妻 頻出語彙
- 表 5 教師 A 家庭全体の展開
- 表 6 言語状況の変化と認識の変化
- 表 7 講師 B 家庭内と家庭外での使用言語
- 表 8 講師 B 頻出語彙
- 表 9 講師 B テーマ・サブカテゴリー，構成語一覧
- 表 10 言語状況の変化と認識の変化

図 1	教師 A 家族間の言語使用状況	
図 2	教師 A 家庭 「語りはじめ」の展開	
図 3	教師 A 家庭 「振り返り」の展開	
図 4	教師 A 妻 語り終わりの展開	
図 5	教師 A 語り終わりの展開	
図 6	講師 B 家族間の言語使用状況	
図 7	講師 B 語りはじめ	
図 8	講師 B 振り返り	
図 9	講師 B 語り終わり	
第 IV 部	市場と言語	475
第 25 章	先行研究・ブータンの市場の社会／言語的背景・仮説の提起	
図 1	ティンプー市内・郊外 5つのゾーン	
第 26 章	市場調査の概要	499
表 1	9つの市場	
図 1	5つのゾーンと9つの市場の配置	
第 27 章	全国市場調査	507
表 1	観察された商と客間の会話	
表 2	インタビュー調査の対象者と平均年齢	
表 3	ゾンカ語・民族語・英語の媒介度（商人・客）	
図 1	市場の地区と商人・客（総合）の居住地の関	
図 2	市場の地区と商人の居住地との関係	
図 3	市場の地区と客の居住地との関係	
図 4	「同地区在住者」の市内居住年月（商人）	
図 5	「同地区在住者」の市内居住年月（客）	
図 6	第一言語（商人と客の計）	
図 7	第一言語（商人）	
図 8	第一言語（客）	
図 9	使用可能言語と複数言語率—商人と客の計	
図 10	使用可能言語と複数言語率（商人）	
図 11	使用可能言語と複数言語率—客	
図 12	第一言語話者数・使用可能言者数（ゾンカ語）	
図 13	第一言語話者数・使用可能言者数（民族語）	
図 14	言語別 第一言語話者数と使用可能者数	
図 15	媒介度（ゾンカ語）	
図 16	使用言語（商人と客計）	
図 17	使用言語（商人）	
図 18	使用言語（客）	
図 19	目的別使用言語（商人と客の計）	
図 20	「呼びかけ」（商人と客の計）	
図 21	「世間話」（商人と客の計）	
図 22	言語選択の理由（商人と客の計）	
図 23	言語選択の理由（商人）	

図 24	言語選択の理由 (客)	
図 25	目的別使用言語	
図 26	言語別選択理由	
図 27	言語別選択の理由 (1) ゾンカ語	
図 28	言語別選択の理由 (2) 民族語	
図 29	「自分の理由」による選択言語	
図 30	「相手の理由」による選択言語	
図 31	「共通語だから」による選択言語	
第 28 章	総合野菜市場王制百周年記念市場	545
表 1	王制百周年記念市場 「切り替え 1」「切り替え 2」発生状況の詳細	
表 2	王制百周年記念市場の「切り替え 1」の分析	
表 3	「言語切り替え 1」の発生率とそのほかの変数	
図 1	資料全国一覧：観察された切り替え	
図 2	「どの言語」から「どの言語」へ	
図 3	言語切り替え 1 の発生と各変数の相関係数	
図 4	パターン 1 <ゾンカ語-ゾンカ語>	
図 5	パターン 2 <民族語-民族語>	
図 6	「切り替え 1」を含む事例<ゾンカ語-民族語-民族語>	
図 7	「切り替え 2」を含む場合 (1) <ゾンカ語-民族語-ゾンカ語>	
図 8	パターン 5—「切り替え 2」を含む場合 (2) <民族語 1-ゾンカ語-民族語 2>	
第 29 章	下町市場ホンコン・マーケット	573
表 1	商人と客における使用可能な「民族語」と第一言語とされる「民族語」の内訳	
表 2	切り替えの発生とそのほかの変数—ホンコン・マーケットとマイ・マートの比較	
表 3	ホンコン・マーケットにおける切り替えの発生分析	
図 1	5つのゾーンと9つの市場の配置	
図 2	観察された使用言語	
図 3	ホンコン・マーケット 目的別 使用言語 (呼びかけ, 商談, 世間話)	
図 4	言語選択の理由	
図 5	「共通語だから」という理由により選択された言語	
図 6	市場と商人・客の居住地との関係	
図 7	ホンコン・マーケットとマイ・マートの地区在住者のティンプーでの在住期間	
図 8	ホンコン・マーケットとマイ・マート 第一言語	
図 9	商人と客 使用可能言語	
図 10	使用された「民族語」の内訳	
図 11	民族語の選択理由 (商人と客別)	
図 12	「共通語だから」という理由で選択された言語	
図 13	ホンコン・マーケットとマイ・マートの切り替えの発生頻度	
図 14	パターン 1 「相互乗り入れ型」	
図 15	パターン 2 「第 3 の媒介言語」	
図 16	パターン 3 (1) 代弁: 「…ze 'lp-de」	
第 30 章	メインストリート ノルジン・ラム	617
表 1	ノルジン・ラム ズレの言語別内訳	
表 2	ノルジン・ラムにおける「切り替え 1」の発生率 (目的別)	

図 1	ティンブー市内	
図 2	ノルジン・ラム 市場と商人・客の居住地との関係	
図 3	ノルジン・ラムの商人と客の同地区在住者のティンブー市内在住期間	
図 4	マイ・マートとホンコン・マーケットの商人と客で市場と同地区在住者のティンブー市内在住期間	
図 5	ノルジン・ラム 商人と客の第一言語	
図 6	ノルジン・ラム 商人と客の使用可能言語	
図 7	観察された使用言語と割合	
図 8	ノルジン・ラム 目的別言語使用の内訳	
図 9	ノルジン・ラム 「世間話」 <商人→客><客→商人><客→客→客>	
図 10	言語選択の理由 ノルジン・ラム	
図 11	ノルジン・ラム「共通語だから」という理由で選択された言語	
図 12	ティンブー市内市場：「共通語」を理由とする選択の割合と言語の内訳	
図 13	事例 1 会話の展開	
図 14	事例 2 会話の展開	
第 31 章 第 IV 部「市場と言語」 結論.....		647
図 1	ティンブー郊外, 市内市場：「共通語」を理由とする選択の割合と言語の内訳	
図 2	ティンブー市内およびその近郊の 5 つの市場における言語使用とその認識	
第 V 部 ある移住者一家の語り		659
表 1	C さん家族の基本プロフィール	
表 2	C さん一家のナラティブ・インタビューの展開	
表 3	C さん家族の言語プロフィール (C さんの報告による)	
表 4	語り【5】 C さん 振り返り 頻出語彙	
表 5	語り【6】 長男 T 振り返り 語彙表	
図 1	C さんの語り「現在の自身と家族の言語状況」	
図 2	語り【1】 C さんによる, 自身と家族の言語状況	
図 3	語り【2】 長男 T の現状認識	
図 4	語り【3】 次男 N の現状認識	
図 5	語り【4】 祖母 G さんの現状認識	
図 6	C さん 振り返り 共起ネットワーク	
図 7	語り【5】 C さんの振り返りの語りの構造	
図 8	テーマ 1: 移住前	
図 9	テーマ 2: 移住直後	
図 10	テーマ 3 ガイドとして	
図 11	テーマ 4 子どもたちを呼び寄せて	
図 12	語り【6】 長男 T 振り返り	
図 13	語り【7】 祖母 G さん 変化	
図 14	語り【8】 祖母にとっての「移住」	
図 15	語り【9】 次男 N にとっての「移住」	
図 16	語り【10】 長男 T にとっての「移住」	
図 17	語り【11】 C さんにとっての「移住」	
第 VI 部 結論 転換期の多言語社会における複言語話者の言語社会化.....		717
図 1	「仲介者」の登場と, 第 3 の「文化」の創出	

巻末資料 目次

資料 1 調査承諾書.....	資料 p. 1
資料 2 インフォーマント	資料 p. 3
資料 2-1 学校教育機関調査 インフォーマント	
資料 2-2 ナラティブ・インタビュー調査 インフォーマント	
資料 3—質問紙調査・半構造化インタビュー調査質問項目.....	資料 p. 7
【調査項目 1】 第 11 章 調査 I 学生対象	
【調査項目 2】 第 11 章 調査 II 一般人対象	
【調査項目 3】 第 12 章 英語借用語に関する調査	
【調査項目 4】 第 13 章 学校教育における民族語に関する調査	
【調査項目 5】 第 14 章 学校寮制度調査 調査 I-A 言語生活	
【調査項目 6】 第 14 章 学校寮制度調査 調査 I-B 言語とアイデンティティ	
【調査項目 7】 第 14 章 学校寮制度調査 調査 II-A 学生対象	
【調査項目 8】 第 14 章 学校寮制度調査 調査 II-B 教師・両親対象	
【調査項目 9】 第 15 章・第 16 章 ノンフォーマル教育 調査 I: インフォーマント	
【調査項目 10】 第 15 章・第 16 章 ノンフォーマル教育 調査 II: ノンフォーマル教育	
【調査項目 11】 第 20 章 学校教師家庭言語調査 調査 I 学校教師 家庭環境調査	
【調査項目 12】 第 20 章 学校教師家庭言語調査 調査 II 学校教師 家庭言語意識	
【調査項目 13】 第 20 章 調査 III 学校教師 家庭言語実践	
【調査項目 14】 第 21 章 地方知識人家庭言語調査 調査 I 地方知識人 家庭環境	
【調査項目 15】 第 21 章 地方知識人家庭言語調査 調査 II 地方知識人 家庭言語	
【調査項目 16】 第 22 章 2 人の両親の語り	
【調査項目 17】 第 IV 部 市場と言語 観察・インタビューカード	
【調査項目 18】 第 V 部 ある移住者一家の語り 現状・振り返り・移住に関する調査	
資料 4 調査結果補足資料.....	資料 p. 39
インタビュー資料 第 13 章 調査 II	
ディスカッション資料 第 13 章 調査 III	
語りの展開 1 第 22 章 教師 A 家庭の話の展開	
語りの展開 2 第 22 章 講師 B 家庭の話の展開	
語りの展開 3 第 34 章 【1】 C さん 現在の言語状況	
語りの展開 4 第 34 章 【2】 長男 T 現在の言語状況	
語りの展開 5 第 34 章 【3】 次男 N 現在の言語状況	
語りの展開 6 第 34 章 【4】 祖母 現在の言語状況	
語りの展開 7 第 35 章 【5】 母親 C さん 振り返り	
語りの展開 8 第 35 章 【6】 長男 T 振り返り 移住直後から現在	
語りの展開 9 第 35 章 【7】 祖母 振り返り 移住直後から現在	
語りの展開 10 第 36 章 【8】 祖母 「移住」という経験	
語りの展開 11 第 36 章 【9】 次男 N 「移住」という経験	
語りの展開 12 第 36 章 【10】 長男 T 「移住」という経験	
語りの展開 13 第 36 章 【11】 C さん 「移住」という経験	

